

『太平記』卷五・卷六（翻刻）

本稿は、二〇〇一年三月刊の『金城学院大学論集』国文学篇第四十三号に紹介した、中西所蔵本『太平記』の翻刻である。本『太平記』は、卷二から卷二十九までの、二十八卷二十八冊が現存しており、ここに紹介するのは、その卷五・卷六に当たる。

本巻の特長と思われる点について、以下に簡単に記しておきたい。本文全体の流れは、これまでの巻と同じく、基本的に神宮徴古館本に一致する。原本文をこすり消して訂正した部分はいくつかあるが、それらの原本文はいずれも神宮徴古館本に一致しており、訂正後の本文は、他の諸本に同じもしくは全く異文となるなど様々である。

翻刻に当たっては次のような点に留意した。

一、底本は、漢字片仮名混じりの表記である。本文の作成に当たっては、あとう限り原形を残すようにとめた。ただし、底本の本文には、脱字を欄外に補ったり、誤記、誤字の類を、見せけちにしてその上に新しい文字を書き加えたり、長文を書き加えたり、甚だしい場合には、張り紙をして異文を追加したりした箇所があり、本文の内容に関わる改変が行われている場合がある。しかもその改変は必ずしも本文と同筆とはいえないところが見られる。そのため翻刻に当たっては、通常の誤字、誤記の類はその訂正に従ったが、その他

の場合には、訂正加筆された部分を、その旨本文中に示すなど、あとう限り訂正以前の元の本文が確認できるように配慮した。

一、各ページの終わりに、そのページの丁数・表裏の別を【一〇】のごとく示した。

一、仮名遣い、送りがな、宛て字、漢文表記等については、底本のままとし、みだりに改定を加えなかったが、書写者特有の造字等については通行の文字に改めたところがある。また「ㄨ」は「シテ」、「ㄨ」は「ナリ」、「ㄗ」は「コト」とした。

一、本文には、地名に二重の、人名に一重の朱引きがあるが、省略した。また朱による訂正は、その旨欄外に示した。

一、底本の破損、虫損、その他判読不能な箇所は□とし、推定できるものは□の中に当該文字を記した。

一、旧漢字は常用漢字に改めた。

一、異体字はそのまま記した。

一、書写者の書き癖はそのまま記した。例：「梟」⇨ける・けり

一、単なる誤記の訂正にとどまらないこすり消し、見せけちは、当該箇所の右に傍線を引き、訂正後の本文を小括弧（ ）に入れた。

一、異本については、小括弧で示した。異本表記のないもので、異本

中	西	筒	水	澤	足
達	井	野	田	立	
治	早	ゆ	佳	歩	
	苗	き	子	美	

に記載のあるものについては、アスタリスク*で示した。例：「恨ムレ（招ヲ）」「十七（六）人」

一、本文への挿入は亀甲括弧「」で示した。

一、本文左に挿入された注については、亀甲括弧に入れ「左注」とした。例：「壯ツカシ（雀サカン）」

一、底本の巻六には、二十五丁オモテから二十七丁オモテにかけて、一部焼損による欠落がある。翻刻にあたっては、該当部分を神宮徴古館本によって補い、で示した。

一、翻刻は、中西達治、筒井早苗、水野ゆき子、澤田佳子、足立歩美の共同作業によるが、最終的文責は中西にある。

（巻第五）

持明院殿御即位事付宣房卿事

都鄙間有二恠異一事

相模入道貳犬事付北条四郎時政事

大塔宮熊野落事付熊野別当挙動事

太平記巻第五

持明院殿御即位事付宣房卿事

元弘二年三月廿二日後伏見院第一御子御年十九

ニテ天子ノ位ニ着（即）給フ御母ハ竹内左大臣公衡公ノ御女後【1オ】

ニハ広義門院ト申多御事也同年十月廿八日ニ河原御

禊ハラ有テ十一月十三日ニ大賞会ヲ遂行ル閔白ハ鷹司ノ

右大臣冬教公別当ハ日野中納言資名卿ニテソ御座

梟トシカ当今奉公ノ人々ハ皆一時ニ望ヲ達シテ門前

市ヲ成シ堂上花ノ如シ中ニモ梶井ノ二品親王天台座主ニ成セ給ヒテ大塔梨本ノ兩門跡ヲ并ツテ御管領有シカハ御門徒ノ大衆群集シテ御拜堂ノ儀式嚴重也加レ之

御室ノ二品法親王法ツ守仁和寺ノ御門跡ニ御移有テ東寺一流ノ法水ヲタ、へ給フ是皆後伏見院ノ御子今上【1ウ】

皇帝ノ連枝也万里ノ少路ノ大納言宣房ノ卿ハ元ヨリ先朝旧勞ノ寵臣ニテ御坐セシ上子息藤房季房二人笠置ノ城ニテ虜レ遠流ニ被レ処シカハ父ノ卿モ罪科深キ人ニテ有ヘカリシヲ賢才ノ聞之有シカハ関東以ニ別儀一其罪ヲ宥レテ

当今ニ召仕ハルヘキ由ヲ奏申ル依レ之日野ノ中納言資明ノ卿ヲ勅使ニテ此ノ由ヲ被ニ仰下一ケレハ宣房勅使ニ対シテ被レ申

梟ハ臣不肖ノ身タリト云共多年奉公ノ身（勞）ヲ以君ノ恩寵ヲ蒙リ官祿共ニ進テ刺政道補佐ノ名ヲケ

カセリ事レ君之礼値ニ其有ルニ非則犯ニ嚴顔ヲ以レ道諍ヒ【2オ】

諫ム三ニ諫不レ納奉レ身以テ退ク有ニ匡正之志無阿順之從一若乃見レ可レ諫而不レ諫謂ニ之ヨリ位ト見レ可レ退而不レ退謂ニ之ヨリ懷

寵ト々々ト戸位ハ国之姦人也ト云リ君今不儀ノ行御座テ武臣ノ為ニ被レ辱給ヘリ是臣カ所レ不知ニヨリテ諫言ヲ不レ獻

ト云ヘ共世人豈其罪無キ責ヲ許ン哉就レ中長子二人遠流ノ罪ニ被レ処我己ニ七旬ノ齡ニ傾リ後榮誰カ為ニカ期ニ先

非何ソ恥サラシヤ不レ如ニ君ノ朝ニ仕ヘテ恥ヲ衰老ノ後ニ懷ンヨリハ伯夷カ行ヲ学テ飢ヲ首陽ノ下ニ忍ンニハト涙ヲ

流シテ宣ヒケレハ資明卿感涙ヲ押煩テ且ハ物ヲモ宣ス良【2ウ】有テ宜ニ梟ハ忠臣ハ必不レ折レ主ヲ見レ仕而可レ治ル耳ト云リ去ハ百

里奚ハ二度秦穆公ニ仕テ永ク霸業ヲ合メ致テ管夷吾ハ飢テ齊ノ桓公ヲ助テ九ノ度ヒ諸侯ヲ朝シム主無レ以レ道射

レ釣ノ之罪上世下皆誇ル（左注ホコフ）中鬻レ皮之恥ト云リ就レ中武

家此ノ如ク

挙申上ハ賢息二人流罪ヲモ何カ赦免ノ御汰沙無ン

伯夷叔齊飢テ何ノ益カ有シ許由巢父遁テ用足ス抑

身ヲ隠シテ永々末葉ノ一跡ヲタ、ムト朝ニ仕テ遠先祖ノ

無窮ヲ輝ヤカサント是非ノ徳ノ失何レ処ニカ有シヤ鳥獸ト

群ヲ同スルヲハ孔子モ不レ取所也ト資明ノ卿理ヲ尽シテ被責【3オ】

梟ノ宣房脚顔色誠ニ屈伏シテ以レ罪寄レ生則ハ違テ古賢タキ

改アラタキヨト云フ〔左注カイ〕之勸忍レ垢トカ全命則ハ犯ス詩人胡顔ナシノカンハセテカト云フ之

譏ト魏ノ曹

子建カ詩ヲ献セシ表ニ書タリシモ理ニコソ存候ヘトテ遂ニ参

仕ノ勅答ヲソ被レ申梟

都鄙間有ニ恠異一事

其ノ比都鄙ノ間ニ希代ノ不思議共多カリ梟山門ノ根本中

堂之内陣ヘ山鳩一番飛来テ新常灯ノ油坏ノ中ヘ飛

入テ翹フタメキ梟間灯明忽ニ消ニ梟此ノ山鳩堂中ノ暗ニ行方

ヲ迷ハシテ瑠璃檀ノ上ニ翅ヲタレテ居タリ梟処承塵方【3ウ】

ヨリ其色朱ヲ指タル如成猫一走出テ此鳩ヲ二ナカラ

食殺テソ失ニ梟抑此新常灯ト申ハ先帝山門ヘ臨

幸ノ御時古桓武天皇自挑サセ給ヒシ常灯ニナスラヘテ

御手自百卅三筋ノ灯心ヲ束子銀ノ御坏ニ油ヲ入テ搔

立サセ給ヒシ灯也是偏皇統ノ無窮ヲカ、ヤカサシヲ為ノ

御願耳ニ非兼テハ六趣ノ群類ノ瞑闇ヲ晝惠光法灯テラストウ

ノ明ルニ思召准テ始置レシ常灯ナレハ未来永々ニ到迄モ

消事無ルヘキヲ鳩ハト〔左注クガウ〕ノ飛来テ打消梟モ不思議也

夫ヲ玄纒ノ走出テ食殺梟モ亦奇特也亦其比洛中ニ【4オ】

田楽ヲモテアソフ事盛ニシテ貴賤皆是ニ淫セリ相模入道

此事ヲ聞及テ新座本座ノ田楽共ヲ呼下シ日夜朝暮

是ヲ弄更更ニ他更無入興ノ余ニ宗徒ノ大名共ニ田

楽一人ツ、ヲ預ケ装束ヲ令レ飾梟間是ハ誰殿ノ田楽

彼ハ何殿ノ田楽ナト云テ金銀珠玉ヲタクマシクシ綾羅錦

繡ヲ飾レリ宴ニソソテ一曲ヲ哥ヘハ相模入道ヲ始トシテ見

物ノ一族大名我劣シト直垂大口ヲヌイテ投出ス集テ是

ヲ積ニ宛モ山ノ如シ其弊幾千万ト云数ヲ不レ知或夜一

献ノ有梟ニ相模入道数盃ヲ傾尽テ醉ニ和シテ立テ舞【4ウ】

事良久是若輩ノ興ヲ進ル舞ニモ非ス亦狂骨ノ言

ヲ巧ニスル戯ニモ非ス四十余ノ古入道方醉狂ノ余ニ舞ナレ

ハ風情有有共覚ヘサリ梟処ニ何ヲヨリ来共不レ知ニ新座

本座ノ田楽共十余人忽然トシテ座席ニ烈テソ舞

哥イ梟其興甚尋常ニ勝タリ暫有拍子ヲ替テ拍

声ヲ聞ハ天王寺ニ有ナルヤヨウレイ星ヲ見ハヤトソ

拍梟或官女此声聞テ余ノ面白サニ障子ノ破ヨリ

是ヲ見タリケレハ新座本座ノ田楽共ト見ツル者一人モ

人ニテハ無リ梟或ハ嘴ハシツカ勾カギテ鳶ノ如ク成モ有或ハ身ニハ【5オ】

翅有テ頭ハ山伏ノ如ク成モ有リ只異類異形ノ媚物共カ姿

ヲ人ニ変シタルニテソ有梟官女見レ之余不思議ニ思ケレ

ハ人ヲ走ラカシテ城ノ入道ニソ告タリ梟城入道取物ヲモ

取不レ合執太刀計ニテ酒宴ノ座席ヘ臨ム城入道方中門

ノ荒ニト歩梟足音ヲ聞テ彼媚物共ハ搔消様ニ打失

相模入道ハ前後モ不知醉臥タリ灯ヲ明ニ挑サセテ遊宴

ノ座席ヲ見ルニ誠ニ天狗ノ集タルヨト覺テ踏汚タル

置ノ上ニ鳥獸ノ足跡多シ城入道且シ虚空ヲニラシテ立

タレ共敢テ眼ニサヘキル物ナシ良久有リテ相模入道驚覺【5ウ】

テ起タレ共惘然トシテ更所レ知無後ニ南家ノ儒者刑部少

輔仲範此事ヲ伝聞テ天下正ニ乱トスル時ニ妖靈星

ト云悪星下テ災ヲ成スト云リ而モ天王寺ハ是仏法最
初ノ靈地ニテ聖徳太子自ラ日本一州ノ未來記ヲ留
メ給ヘリ去ハ彼媚物共カ天王寺ノ妖靈星ノ哥梟ハ何
様天王寺ノ辺ヨリ天下ノ動乱出来シテ国家敗亡シ
ヌト覺ル哀国王徳ヲ納メ武家仁ヲ施シテ妖ヲケス謀
ヲ致レヨカシト申梟カ果テ思知ル、世ニ成ニ梟彼仲範誠
ニ未然ニ凶ヲ鑑梟博覽ノ程コソ難有梟【6オ】

相模入道此ル妖恠ニモ驚ス倍 奇物ヲ愛ル事更ニ休ム時ナ

相模入道此ル妖恠ニモ驚ス倍 奇物ヲ愛ル事更ニ休ム時ナ
シ或時庭前ニ犬共ノ集リテ囓合梟ヲ此禪門誠ニ面白
事ニ愛ル夏骨髄ニ入リ即諸国ヘ相催テ或ハ正税官

物ニツノツテ是ヲ尋或ハ権門高家ニ仰テ是ヲ求梟間
国々ノ守護国司所々ノ一族大名十疋廿疋飼立テ

犬ヲ鎌倉ヘ引進ス飼ニ魚鳥ヲ以シ維ニ金銀ヲ以テセシ
カハ其弊甚少ナカラス輿ニ乗シテ道ヲ過ル日ハ道ヲ急行
人モ馬ヨリ下テ是ニ跪キ農ヲツトムル里民モ夫ニ取レテ【6ウ】
之ヲカク此ノ如ク賞甄不輕シカハ聞ニアキテ錦ヲ着タル犬鎌

倉中ニ充滿シテ四五千疋ニ及リ毎月十二度ノ犬合ノ日トテ
被レ定シカハ一族大名ノ御内外様ノ人或ハ堂上ニ座ヲ
ツラ子或ハ庭前ニ膝ヲ屈シテ見物ス時ニ兩陣ノ犬共ヲ一二百

疋ツ、放合タレハ入違イ追イ合ヒ上ニ成下ニ成テ囓合声天ヲヒ
、カシ地ヲウコカス心ナキ人ハ是ヲ見テ穴面白ヤ只戰場
ニ雌雄ヲ決スルニ不レ呉ト思ヒ智有人ハ是ヲ聞テ穴忌相

ヤ偏ニ是郊原ニ戸骸ヲアラソウニ似タリト悲メリ見聞ノ
所ニ准ル耳目矣ト云共其ノ前相皆鬪死亡中ニ有リテ浅【7オ】
増カリシ振廻也抑時已ニ澆季ニ及ンテ武臣天下ノ權ヲ

取事源平兩家ノ間ニ落テ已ニ度々ニ及ヘリ然ニ天道

盈ヲカク故ニ或其時一代ニシテ亡或ハ一世ヲ不レ待シテ失リ今相
模入道ノ一家天下ヲ保テ已九代ニ及ル事故可有鎌倉

草創ノ始北条四郎時政榎(江)ノ嶋ニ参籠シテ子孫ノ
繁昌ヲ祈事切也三七日ニ當梟夜赤袴ニ柳色ノ衣

着タル女房ノ端嚴美麗ナルカ忽然トシテ時正力前ニ來テ
告テ云テ汝ノ先生ハ箱根法師ニテ有シ時六十六部ノ法花経ヲ

書テ六十六ヶ国ノ靈地ニ納タリシ善根ニヨリテ二度此【7ウ】
國ニ生事ヲ得テ去ハ子孫永ク日本ノ主ト成テ榮花ニ誇ヘシ但其

振廻若所レ違有ラハ七代過ヘカラス我ガ所レ云不審有ハ国々ニ
所レ納ノ靈地ヲ見ヨト云捨テ立歸梟背姿ヲ見レト指モ嚴

カリツル女房忽ニ伏長二十丈計成大蛇ニ成テ海中ニ入ニ梟
頓テ其跡ヲ見ニ大成鱗ヲ三落セリ時正所願成就シヌ

ト悦テ彼鱗ヲ取テ旗ノ紋ニソ押タリ梟ニ鱗形ノ紋是
也其後弁才天ノ御告ニヨリテ国々ノ靈地ヘ人ヲ遣シ法花

經之奉納所ヲ見モ梟ニ俗名ノ時正法師ノ名ニ替リテ大法
師時正ト封納ノ筒ノ上ニ書タリ梟コソ不思議ナレ去ハ今相

模入道ノ一家天下ヲ七代ニ過テ保梟ニ是榎(江)嶋ノ利生
亦過去ノ善根ニ感シ梟故也今ノ高時禪門已ニ七代ヲ過テ

九代ニ及テ去ハ可亡時分到來シテ此ル不思議ノ振廻ヲモ被
レ為梟カトソ覺シ

大塔宮熊野落事付熊野別当挙動支

去程ニ大塔ノ二品親王笠置城ノ安否ヲ聞食レン為ニ

且ク南都般若寺ニ忍テ御座有梟カ笠置城已ニ落レテ
主上被レ捕サセ給ヒヌト聞シカハ虎尾ノ恐御身上ニセマリテ

天地(下)広ト云共一身ヲ可レ隱所モ無ク日月明ト云共只長【8ウ】
夜ニ迷ヘル御心地シテ昼ハ野原ノ草ニ隠レテ露ニ伏鶉床ニ

御泪ヲ争イ夜ハ弧村ノ辻ニタ、スミテ人ヲトカムル里ノ犬ニ御心ヲ

悩サル何所トテモ御心安カレヘキ所ナケレハ角テモ暫ハト思
食レ梟処一乘院候人按察法眼好專如何シテ此衷

ヲ聞リケン五百余騎ヲ卒シテ未明ニ般若寺ヘソ寄タリ

梟時節宮ニ奉レ付タル一人モ無リケレハ一防々テ落

サセ給ヘキ様モナシ兵透間モナク寺内ニ打入タレハ紛テ御

出有ヘキ方モ無シ去ハ善自害ヲセント思召テ押膚脱セ給

タリ梟カ事ノ叶サラン期ニ臨ンテ腹ヲ切ンスルモハ敢安カ【9オ】

ルヘシ若哉ト隠テ見ハヤト思召返シテ仏殿ノ方ヲ御覽

スル二人ノ読懸テ置タル大般若ノ唐櫃三有ニノ櫃ニハ御

経入テ未蓋ヲ明ス一ノ櫃ハ御経ヲ過半取出シテ蓋ヲモ

為サリ梟此蓋開タル櫃ノ中へ御身ヲシ、メテ臥セ給ヒ上ニ御

経ヲ引覆テ隠テ隠形呪ヲ御心ノ内ニ唱テソ御座梟若

風戾被レ出ハ頓テ突立ント思食テ如レ氷成刀ヲ抜テ御

腹ニ差当兵ノ爰ニソト申一言ヲ令待給ヒ梟御心ノ内

推量モ猶可レ浅去程ニ兵仏殿ニ乱入レ仏壇下天井ノ

上迄所レ残無風戾梟カ余ニ求煩テ是躰ノ物コソ恠ケレ【9ウ】

彼成レ大般若ノ櫃ヲ開テ見ヨトテ蓋ヲシタル櫃ニヲ開テ

御経ヲ皆取出シ底ヲ返シ見ケレ共御坐サス蓋ノ開タル櫃

ハ見迄モ無トテ兵皆寺中ヲ出去又宮ハ不思議ノ御命

ヲ継セ給ヒ夢ニ虎尾ヲフム心地シテ猶櫃ノ中ニ御座梟若

亦立帰テ委レ風戾度モヤ有ンスラント御思案有テ

先二兵ノ風戾テ見タリツル櫃ノ中へ入替ラセ給テソ御坐

梟如レ案兵亦仏殿ニ立返テ先ニ蓋ノ開タル櫃ヲ能々

見サリツルカ不審（左注ヲホツカナシ）ソトテ御経ヲ皆移テ見梟カカラ

ト打笑テ大般若ノ櫃ノ中ヲ能々風戾タレハ尋ル大塔宮【10オ】

ハ居サセ給ハテ大唐ノ玄奘三蔵コソ有ケレト戯ケレハ兵

皆同音ニト、笑テ門ヨリ外ヘソ出ニ梟是偏摩利支天

ノ冥応亦十六善神ノ擁護ニ懸レル命也ト信心御肝

ニ銘シ感涙御衣ヲヌラセリ角テモ南都辺ノ御隠且モ

可レ叶モ無リケレハ即般若寺ヲ御出有ニ熊野ノ方ヘソ

令レ落給ヒ梟御供ニハ光林坊玄尊赤松則祐木寺相

模岡本三川片岡八郎矢田彦七平賀三郎彼此以上

九人也宮ヲ始參ラセテ御供者共皆柿衣ニ負ヲカケ頭

巾眉半ニセメテ其中ニ年闕タルヲ先達ニ作立テ田舎【10ウ】

山伏ノ熊野參詣スル躰ニ見タリ梟此宮元來龍樓鳳

闕ノ内ニ長セ給テ仮ニモ花斬香車ノ外ヲ出サセ給ハ又御

更ナレハ御步行ノ長途ハ定テ叶ハセ給ハシト御供者共兼

テハ心苦思梟ニ案ニ相違シテ何習ハセ給タル御更ナラ子共

恠氣成打襪腰巾ニ草鞋メシテ少モ疲タル御氣色モ無

路次ニ行合道者モ勲修ヲツメル先達モ思崇ニ更モ無

梟由良湊ヲ見巨ハ外渡ル船ノ楫ヲタヘ浦ノ浜木

綿幾重共知ヌ浪路ニ啼千鳥糺諾ノ遠山ハル々々ト藤

代ノ松ニカ、ル浪和哥吹上ヲ余所ニ見テ月ニ磨ケル玉【11オ】

津嶋光モ今ハサラテタニ長汀曲浦ノ旅ノ道ハ心ヲ碎習

ナルニ雨ヲ合ル孤村ノ樹夕ヲ送ル遠寺ノ鐘哀催時シモ有

切目ノ王子ニ着セ給其夜ハ崇祠ノ露ニ御袖ヲ片數終

夜祈申セ給梟ハ南無婦命頂礼三所権現滿

山護法十萬部類眷屬八万金剛童子垂迹和光

ノ月明ニ分段同居ノ闇ヲテラサハ逆臣忽亡テ朝廷

再、ヒ耀シゴトヲ令レ見給ヘ伝承ル兩所ハ是伊弉諾伊弉

冊ノ応作也吾君其苗裔トシテ朝日忽ニ浮雲ノ為ニ

被レ弊タリ丹心不レ偽ト云共天鑑今空ニ似タリ神若為ハ【11ウ】

レ神ハ君蓋為レ君ト五躰ヲ地ニナケ一心ニ誠ヲ致テ祈申

セ給ヒケレハ式ナキ御勤感応何ソ空カラント神慮モ暗ニ被レ測タリ終夜礼拜ニ御窮屈有ケレハ御臂ヲ曲テ枕ト

シ且ク御真寢有梟御夢ニ髮結タル女童一人来テ

熊野三山ノ間ハ尚モ人ノ心不レ和シテ大儀難レ成是ヨリ十

津川ノ方ヘ御越候テ且時ノ致ンヲ御待候ヘシ兩所権

現ヨリ案内者ニ被レ付参ラセテ候ヘハ御道指南仕ルヘシ

ト申ト御覽シテ御夢則覺ニ梟是兩所権現ノ御告

也ト憑敷思召レケレハ未明ニ御悅ノ奉弊ヲ捧テ頓テ【12オ】

十津川ヲ尋テソ入セ給ヒケル其道ノ程卅余里方間ニハ絶

テ人里モ無リケレハ或ハ峯越雲ニ枕ヲソハタテ、苔ノ

庭ニ袖ヲ敷或ハ岩漏水ニ渴ヲシノキテ朽ノ橋ニ肝ヲケス山路

ニ雨ナケレ共空翠常ニ衣ヲウルホス向上ト見上ハ万仞ノ

青壁刀ヲ以削レリ(レル)(如)直下ト見クタセハ千尺ノ碧潭藍

以テ染タルニ似テ数日ノ間此ル嶮難ヲ経サセ給ヘハ御身モ疲終テ

流汗水ノ如ク御足ハ欠損シテ御草鞋血ニ染レリ御供ノ

人トテモ其身鉄石ナラ子ハ皆渴疲テ墓々敷モ歩得

サリケレ共御腰ヲオシ御手ヲ引テ道ノ程十三日ト云ニ【12ウ】

津川ヘソ令レ着給ヒ梟宮ヲハ兔アル辻堂ノ内ニ奉レ置テ

御供ノ者ハ皆在家ニ行熊野参詣ノ山伏ノ道ニ迷テ漂

出タル由ヲ申ケレハ在家ノ者共憐ミヲタレテ粟飯柿(櫛)カ

イナト云物ヲ取出シテ其飢ヲ相資ケ宮ニモ彼様ノ物進

テソ二三日カ程ハ辻堂ニ置参セ梟角テハ始終何成

ヘシ共不レ覺ケレハ光林坊玄尊兔有在家ノ是ソサ

モト有人ノ家成ラント覺敷所ニ行テ童ノ出タルニ家ノ

名ヲ問ヘハハ竹原八郎入道殿ノ甥ニ戸野兵衛殿ト申

人ノ許ニテ候トソ申梟サテハ是コソ兼テヨリ弓矢執【13オ】

テ能者ト聞及シ者ナレ何モシテ是ヲ憑ハヤト思ケレハ門ノ内ヘ

入テ事ノ躰ヲ見聞処内ニ病人有ト覺テ哀貴カラ

ン山伏ノ出来カシ令レ祈参ラセント云声シ梟玄尊聞レ之

其也究竟ノ事コソ有ト思ケレハ声ヲ高ニ揚テ申

梟ハ三重瀧ニ七日打レ那智籠百日早テ卅三所順

礼ノ為ニ罷出テ候山伏共道ニ迷テ此里ニ出テ候一夜

ノ宿ヲモカシ一日ノ飢ヲモ休給ヘト申タリケレハ内ヨリ恠ケ

成女一人出合テ是コソ可レ然神仏ノ御資ト覺テ候ヘ

是ノ主ノ女房物恠ヲヤマセ給候祈テタハセ給ヒナンヤト申【13ウ】

ハ我等ハ夫山伏ニテ候間叶候マシ彼ニ見候辻堂ニ足ヲ

病ミテ此一兩日被レ居テ候先達コソ校驗第一ノ人ニテ

候ヘ此様ヲ申ン子細候ワシト申ケレハ女大悦テ去ハ頓テ

其先達ヲ是ヘ入参ラセ給ヘト申テ悦合ル莫限ナシ

玄尊走帰テ此由ヲ申ケレハ宮ヲ始奉テ御供ノ者

共皆彼館ヘ入セ給フ宮病者ノ臥タル所ニ進(近)セ給ヒテ且

御加持有テ千手陀羅尼ヲ二三反カ程高カニ遊シテ

御念珠ヲ操給ヒケレハ病者自口走テ様々ノ事ヲ申

梟カ明王ノ縛ニ被レ懸タル躰ニテ手足ヲシ、メテ震惶【14オ】

テ五躰ヨリ汗ヲ流シテ物恠即立去ケレハ病者忽ニ能成梟

主男不レ斜ニ悦テ我蓄タル物ハ候ハ子ハ別ノ御引出物迄ハ

叶候マシ枉テ十余日はニ御逗留候テ御足ヲ休サセ給

ヒ候ヘ例ノ山伏骨ニ忍テ御帰候ヲト存スレハ乍レ恐是ヲ質

ニ賜ントテ面々ノ負共ヲ取合テ皆内ニコソ置タリケレ御

供ノ者共上ニハ其気色ヲ顯スト云共下ニハ悦思フ莫限

ナシ角テ十余日ヲ過セ給ヒ梟ニ或夜家主兵衛尉客

殿ニ出テ焼火ナトサセ四方山ノ物語シ梟次ニ申梟ハ方

々ハ定聞及ハセ給タル叟モ候覽誠ヤラン大塔ノ宮都ヲ【14ウ】

落サセ給ヒテ熊野ノ方ヘ令レ赴給候ケンナル三山ノ別当

定遍僧都ハ無^レ式武家ノ人ニテ候ヘハ熊野ノ辺ニ御
 忍有^ン度ハ難^レ叶覚候哀此里ヘ御入候ヘカシ所コソ
 分内狭候ヘ共四方皆嶮^{サガシキ}岨ニテ十里廿里カ内ヘハ鳥モ
 難^レ翔^ガ所ニテ候其上人ノ心不^レ偽シテ弓矢ヲ取事世ニ
 超タリ左候ヘハコソ平家ノ嫡孫ニ維盛ト申臬人モ我等
 カ先祖ヲ憑テ此所ニ隠^レ遂^ニ源氏ノ世迄モ無^レ恙^{ツツ}テ候
 臬トソ承ルト語ケレハ宮誠嬉氣ニ思食タル御氣色
 頭テ若大塔宮ナトノ此所ヲ御憑有テ入セ給ヒタラ【15才】
 ハ被^レ頼^サセ給候ハンスルカト令^レ問給ヘハ戸野ノ兵衛申ニヤ
 及候身不肖^ニ候ヘ共某一人タニ此ル度ソト申ハ鹿瀬
 蕪坂湯浅阿瀬川小原芋^ウ瀬中津川吉野十八ヶ郷
 ノ者共迄モ手指者ハ候マシトソ申臬其時宮木寺
 相模ニ御救目有ケレハ此兵衛カ側ニ居寄テ今ハ何ヲ
 カ隱可申彼先達ノ御坊コソ大塔ノ宮ニテ御坐有^ト申
 臬ハ此兵衛猶モ不審氣ニテ彼此^カ顔ヲ情ト守臬
 間片岡五郎矢田彦七アラ熱ヤトテ頭巾ヲヌキテ側ニ
 指置^テ誠ノ山師^{フツ}ナラ子ハ月代ノ跡隠ナシ兵衛見之^モ実^モ山【15ウ】
 臥ニテ御座サリ臬賢ソ此事ヲ申出タリ臬穴^{アサシ}蕭^ヤ此ノ
 程ノ振舞サコソ尾籠ニ思食ツラメト以外ニ驚テ首ヲ地ニツ
 ケテ手ヲツカ子疊ヨリ下テ蹲踞^{ソソ}セリ俄^ニ黒木ノ御所ヲ
 作りテ宮ヲ守護シ奉^リ四方ノ山々ニ関^ヲ居^テ道ヲ塞^キテ用心
 緊^ソ見ヘタリ臬是尚大儀ノ計略難^ク叶^テ叔父^ヲ竹
 原八郎入道ニ此由ヲ語ケレハ入道聽^レ而戸野カ語ニ随イテ宮
 ヲ我館ヘ入參テ誠ニ無^レ式氣色ニ見ケレハ御心安^ク思召^テ
 爰ニ半年計御坐有臬程二人ニ見知レシト被^ニ思食^ケ
 ル御支度ニ御還俗有ケレハ竹原入道カ息女ノ内^ケ御寝【16才】
 所ヘ被^レ召御覺^ヘ異^レ他也サテコソ家主入道^モ弥志ヲ傾^ケ近

辺ノ郷民モ次第^ニ帰服申タル由ニテ却テ武家ヲハ編ケ
 レ熊野別当定遍此度^ヲ聞テ十津川ヘ寄^ンスル事ハ縦
 十萬騎ノ勢有共叶ヘカラス只其辺ノ郷民共ノ欲心ヲ進
 メテ宮ヲ他所^ヘ卒^ニ出奉^{ント}相計テ道路ノ辻^ニ札ヲ書テ
 立臬ハ大塔宮奉^レ討^ン者ニハ非職凡下ヲ不^レ云伊勢ノ
 栗真庄ヲ恩賞ニ被^レ宛行ヘキ由關東御教書在^レ之
 其上^ニ定遍先三日カ中ニ六萬貫ヲ与ヘシ御内候人御手
 人ヲ討タラン者ニハ五百貫降人ニ出タラン輩ニハ三百貫【16ウ】
 何モ其日ノ中ニ沙汰^レ与ヘシト奥ニ起請ノ詞ヲ乘^テ嚴密
 ノ法ヲソ出タル夫移^リ氣ノ信ハ約^クヲ堅センカ為^テ猷^ケ芹ノ賂
 ハ志ヲ奪ハンカ為^ナレハ欲心強盛ノ八庄司共此札ヲ見テ
 何シカ心變^シ色替^テ恠^キ振廻^ル共ニソ聞臬宮角テハ此
 所ノ御止住^ス始^メ終^ニ惡^カリナン吉野ノ方ヘモ御出有ハヤト被仰
 臬ヲ竹原八郎入道如何其事ハ候ヘキト強止申ケレハ彼
 カ心ヲ破ラン度モ追^サニ叶ハセ給^ハテ恐懼ノ内二月日ヲ送ラセ
 給ヒ臬ニ結句八郎入道カ子息竹原弥五郎父カ命ヲ
 背テ宮ヲ奉^レ討^トスル企有^ト聞シカハ宮潛^ニ十津川^ヲ【17才】
 出サセ給テ高野ノ方ヘトソ令^レ赴給臬其道小原芋
 瀬中津川ト云敵陣ノ難所ヲ経テ通^ル道ナレハ中々敵ヲ
 打憑^テ見ハヤト被^ニ思食^ニ先芋瀬ノ庄司カ許ヘソ合入給ケ
 ル芋瀬宮ヲ我館ヘハ入參セテ側成堂ニ奉^レ置使者ヲ
 以テ申臬ハ三山ノ別当定遍^合武命ニテ隱謀^与党ノ
 輩ヲハ關東ヘ注進^ニ進^ニ事ニテ候ヘハ無^ニ左右^ニ此道ヨリ通^シ
 進セン度後ノ罪科陣謝ニ抛有ヘカラス候乍^レ去宮ヲ留
 參セン度ハ其恐多候ヘハ御供ノ人々ノ中ニ名字^ヲ可^ラシ其ス
 ル人ヲ一兩人出給テ武家ヘ召渡候カ不^レ然ハ御紋御旗【17ウ】
 ヲ給テ合戦ヲ仕テ候ツル支証^ニニテ候ト武家ヘ可^レ申ニ

テ候此二ノ間何モ不レ可レ叶トノ御説ニテ候ハ、力無ク一矢仕ルニテ候ト誠亦余議モ無氣ニソ申入タリ梟宮ハ此叟何モ難儀也ト思食テ敢テ御返事モ無リ梟ヲ赤

松律師則祐進出テ申梟ハ危ヲ見テ命ヲ致ハ士卒

ノ所守ニテ候去ハ紀信ハ詐^{イッハツ}テ敵ニ降^{キヘウ}魏豹ハ留テ城ヲ

守ル皆主ノ命ニ替リテ名ヲ留メシ者ニテ候ハスヤ兎シテモ角シテモ彼カ所存解テ御所ヲ通參ヘキニテ候ハ、則

祐御大事ニ替リテ罷出候ハン事子細有間敷ニテ候【18オ】

ト申ハ平賀三郎聞^レ之末座ノ意見ハ卒^ルノ儀ニテ

候ヘ共此難苦ノ中ニ付纏^イ奉リタル人ハ一人也共上ノ御

為^{コトウ}ニ股肱耳目ヨリモ捨難ク思召レ候ヘシ就^レ中芋瀬庄

司カ所申実モ黙止シ難ハ其安キニ付テ御旗計ヲ被^レ下

ニ何ノ煩カ候ヘキ戰場ニ臨習ヒ馬物具ヲ捨太刀ヲ落

シテ敵ニ被^レ取更其迄ノ恥ナラス唯彼カ申請ニ任テ御

旗ヲ被^レ下候ヘカシト申ケレハ実ト思食成テ日月

ヲ金銀ニテ打付タル錦ノ御旗ヲ芋瀬ノ庄司ニソ被^レ下

梟角テ宮ハ遙ニ行過サセ給ヒヌ且有^テ村上彦四郎【18ウ】

義光カ跡ニサカリテ宮ニ追付參ント急梟ニ芋瀬庄司

端ナク道ニテ行合タリ芋瀬カ下人ニ令^レ持タルヲ見ハ

宮ノ御旗也村上恠テ事ノ様ヲ問ニ然々ノ更ト語ケ

レハ村上是抑何更ソ忝モ四海ノ主ニテ御座天子

ノ御子朝敵追伐ノ為ニ御門出有^ル路次ニ參合テ汝

等程ノ大凡下ノ奴原カ其様更可仕様ヤ有^ルイテ

其旗トテ引奪テ押取持タリツル芋瀬カ下人ノ大

ノ男ヲ搔鬪テ四五丈計ソ投タリ梟其力ノ無^レ類ニ

ヤ恐レタリケン芋瀬庄司一言ノ返更モ不^レ為ケレハ村【19オ】

上自御旗ヲ肩ニカケテ程無宮ニ追付奉^ル義光御

前ニ跪キテ此様ヲ申ケレハ宮誠嬉氣ニ打笑セ給テ

則祐カ忠ハ孟施舍カ義ヲ守リ平賀カ智ハ陳丞相^{ハヤ}

カ謀ヲ義光カ力ハ北宮黝カ威ヲシノケリ何^ソ我^レ此三傑

ヲ以テ天下ヲ不^レ治ヤト被^レ仰梟ソ忝キ其夜ハ椎柴垣^ノ

問頭ナル山賤ノ庵ニ御枕ヲ傾サセ給テ明ハ小原ヘト志テ

打立給タル処^ニ薪負ル山人ニ行合テ道様ヲ御尋有

梟ニ心ナキ樵夫迄モ追見知參テヤ有ケン新ヲ

オロシ地ニヒサマツキテ是ヨリ小原ヘ御通候ハンスル道ニハ【19ウ】

玉置庄司殿トテ無武武家方ノ人御座候也此人

ヲ御語候ハテハ幾等ノ大勢ニテモ御座候ヘ御通候ヒ

又共覺候ハス恐有申更ニテ候ヘ共先人ヨ一二人御

使ニ被遣候テ彼人ノ所存ヲモ聞食レ候ヘカシトソ申

タリ梟宮情ト聞食テ蕪^{ウツケウ}（左注クサカリ）ノ詞迄モ捨サルハ是也実

モ此樵夫カ所申サモト覺^{ホッル}トテ片岡八郎矢田彦七

二人ヲ玉置庄司カ許ヘ被^レ遣テ只今此道ヲ御

通有ヘキ也道々ニ居タル警固ニ木戸ヲ開逆木ヲ

除サセヨトソ被^レ仰タリ梟玉置庄司御使ニ出合テ更ノ

由ヲ聞無返更ニテ内ヘ入梟カ頓テ若党中間共

物具ヲシ馬^ニ鞍ヲク躡緊ク見梟間二人ノ御使不^レ

也々々此更叶マシ氣也去^ハ急キ走歸テ此由ヲ申^ン

トテ足早ヤニ梟梟ニ玉置若党五六十人執太

刀計ニテ追懸タリ二人者共立止リ小松ノ二三本

茂リタル陰ヨリ跳出テ真先ニ進タル武者ノ馬ノ諸

膝離テ刎落サセ返太刀ニテ頸打落シテ仰タル太刀

ヲ推直テ立タリ跡ニツ、キ追梟者共見^レ之敢テ進

近ク者一人モナシ只遠矢ニコソ射置メ梟片岡八郎【20ウ】

矢二筋射付ラレテ今ハ難^レ資ト思ヒケレハヤトノ矢田殿我

ハ兎モ角モ痛手負タレハ此ニテ討死センスル也御辺ハ谷
 キ宮ノ御方ヘ走り參テ此由ヲ申一先落參ラセヨ
 ト再往強テ申ケレハ矢田モ一所ニテ討死セント思ケレ
 共実^キ宮告申サランモ却テ不忠也ケレハ無力只
 今討死スル傍輩ヲ見捨テ歸リ梟心中推量レテ
 哀也矢田遙^ニ行延テ跡ヲカヘリ見レハ片岡早被^レ討
 ヌト見テ血ノ付タル首ヲ太刀ノ鋒^{ツキ}ニ突貫テ持タル人
 有矢田益キ走歸テ宮ニ此由ヲ申ハサテハ遁又道ニ
 行廻^リ又運ノ窮達歎^クニ言ナシトテ御供ノ人ニ到迄モ
 中々騒ク気色ソ無リ梟去レハトテ此ニ可^レ留^ニ非^ス被^レ行
 スル所迄行ヤトテ上下六十余人ノ兵共宮ヲ先^ニ立參
 ラセ向ノ山路ヲソ越行梟已ニ中津川ノ到下ヲ越サント
 シ給梟^ニ向ノ山ノ兩方ノ峯ニ玉置カ勢ト覺テ五
 六百人カ程浸宵ヨロヒテ楯ヲ真^ニ進メ射手ヲ左
 右^ハ分^チ鬨^ク声ヲソ上タリ梟宮^ニ御覽シテ玉顏
 殊^ニ儼^{（左注イカメ）}ニ打笑セ給ヒ御手者共ニ向テ矢種ノ有ンスルホ
 トハ防矢仕^レ心静ニ自害シテ名ヲ万代ニ可^レ殘但各【21ウ】
 相構テ我ヨリ先ニ腹切事有ヘカラス面ノ皮ヲハキ耳
 鼻ヲ切テ誰頸共見ヌ様ニシナシテ可捨其故ハ我首
 若獄門ニ掛リテ被曝ナハ天下ニ寄ノ志ヲ存ン者ハ
 カヲ失ヒ武家ハ弥所^レ恐ナカルヘシ死セル孔明生^ル仲達
 ヲ走シムト云コト有去ハ死テノ後迄モ威ヲ天下ニノコスヲ
 以テ良將トセリ今ハ兎テモ遁又所ノ相構人々^{キタナ}鏖
 ヒレテ敵ニ被^レ笑ナト被^レ仰ケレハ御供兵共何故ニカ^{キタナ}鏖^レ
 候ヘキト申テ御前ヲ立敵大勢ニテ責上坂中ノ
 辺迄下向^テ其勢僅ニ三十二人は皆一人当千【22オ】
 兵成ト云共敵七百余騎ニ立合テ可^レ鬪様モ無リ梟

寄手ハ楯ヲ雌羽ニ衝^ト敦^{カツキ}テ覆上^リ防兵ハ打物ノ鞘ヲ
 ハツシテ相懸ニ近^ク成^ル処ニ北ノ山ノ峯ヨリ赤旗三流松
 ノ嵐ニ飄シテ其勢六七百カ程蒐出タリ次第近ク
 俟^ニ三手^ニ分テ鬨^ク声ヲ揚玉置ノ庄司カ勢ニ相向^テ真
 先ニ進タル武者大音声ヲ揚テ紀伊国之任人野
 長瀬六郎同七郎其勢三千余騎ニテ大塔宮ノ
 御迎ニ參^ル処ニ忝モ此君ニ向奉リテ弓ヲ引楯ヲツ
 ラヌル人ハ誰人ソヤ玉置庄司殿ト見ハ^{ヒカ}僻^ニ目カ只今【22ウ】
 可^レ亡^ル武家ノ逆^キ命ニ随テ即時ニ運ヲ開セ可^レ給親
 王ニ敵對申テハ一天下ノ間何処ニカ身ヲ置ント思^フ
 天罰遠カラス是ヲ行^ン我等カ一戰ノ中ニ有^リ余ス
 ナ洩スナト叫喚^テ是ヲ見テ玉置庄司カ五百余騎不
 レ叶トヤ思ケン楯ヲ捨旗ヲ卷テ忽ニ四角八方へ逃散^ス
 其後野長瀬兄弟二人冑ヲヌキ弓脇挾テ遥
 畏^ル宮御前近ク被^レ召テ山中ノ為^レ軼大儀之計
 略難^レ叶カルヘキ間大和河内ノ方へ打テ出勢ヲ付ンカ為^ニ
 進發セシムル処ニ玉置庄司カ只今ノ^{キキ}挙動^{（左注フルマイ）}当手ノ兵ハ
 万死ノ内ニ一生ヲモ難^レ得ト覺ツルニ不慮ノ助^{アツ}ニ逢^テ天
 運猶憑有ニ似タリ抑此事何トシテ存タリケレハ今此戰
 場ニ馳合テ逆徒ノ大軍ヲ靡^ケヌルソト御尋有ケレハ野
 長瀬畏テ昨日ノ昼程二年十四五計ニ候シ童ノ
 名ヲハ老松ト云ソト称候シカ大塔宮ノ明日十津川
 ヲ御出有リテ小原へ御越有ンスルカ一定道ニテ難ニ
 合^レ合給ヌト覺ルソ御志ヲ存ン者ハ谷御迎ニ參^レト触
 廻シ間御使也ト得意テ參シテ候トソ中梟宮此^ニ衷
 ヲ御思案有ニ直事ニ非スト思食合テ年来御身【23ウ】

ヲ不レ被レ離臯膚御守ヲ御覽スルニ御守ノ口少開タリ
臯間恠ク思食テ開テ御覽セラレケレハ北野天神之御
神躰ヲ金銅ニテ鑄參ラセラレタル其御眷属老
松明神ノ御躰遍身ヨリ汗^{カサ}足^{カサ}土ノ付タリケ
ルコソ不思議ノ御夏ナレ佳運神慮ニ叶ヘリ逆徒ノ対
治何疑カ可有トテ宮ハ是ヨリ槇野上野房聖賢
拵タル槇野城ハ入レ御有臯力爰モ猶分内狭クテ可
レ惡トテ吉野ノ大衆ヲ御語有リテ即愛染宝塔ヲ
城郭ニ構ヘ岩切通吉野川ヲ前ニ当テ三千余【24オ】
騎ニテ楯籠^セ給^セヒタリトソ聞^シ

太平記卷第五【24ウ】

(卷第六)

- 三位殿御夢相事
- 楠出張天王寺事
- 楠望見未來記事
- 関東勢上洛事^付三城手配事
- 赤坂城合戰事^付人見本間拔懸夏

太平記卷第六

三位殿御夢想夏

夫年光不レ停コト奔箭下流之如^レ水哀^レ楽互^ニ易^ル

夏紅菜黃落之樹ニ似^リ然^ハ此世間之分野夢トヤ【1オ】

云^シ覺^クトヤ云^シ憂^キ喜^キ相^キ共^ニ感^スレハ袂ノ露ヲモヨホス夏

今^ニ不^レ始^ト云^ヘ共去年九月ニ笠置城破^ラレテ先帝隠

岐国ヘ被^レ遷サセ給^ヒシ後八百司ノ旧臣愁ヲ抱^キ所々ニ

籠居シ三千之宮女涙ヲ滴^{シク、ツテ} 面々ニ伏沈ミ給^フ中ニ
モ民部卿三位殿ト聞^ヘシハ先朝之御寵愛淺カラサル
上大塔ノ宮ノ御母堂ニテ御坐シカハ傍^カ之^カ女御后モ
花ノ渡^アノ深山木ノ色香モ無^キカ如^ク也世ノ間靜^{ナカシ}マラザリシ
後ハ万引易タル九重ノ内ノ御住居モ尚貞^{サダ}ナラス荒^レ

ノミ増ル浪之上ニ船流タル海士ノ心地シテ寄ル方モナキ御【1ウ】
思之上ニ打副^ツテ君ハ西海ノ帰^ラヌ浪ニタ、ヨイテ(漂^{タ、ヨクセ} 給^テ)乾^{カクマ}間^マモ
無^キ御袖之気色ト承シカハ空^キ思^フ万里ノ曉ノ月ノ傾^ケ
ナカラ宮ハ南山ノ道ナキ雲ニ迷^{マ、フセ給}浮^{ウキ}終^ヘ(憂^ス不堪^ズ)タル御住居ト聞^レ
ト書^ヲ三春ノ暮ノ鴈ニ付カタシ彼ト云此ト云一方ナ
ラヌ御歎^キニ青^イ慈^ズノ鬢^{シヅカ}疎^カニシテ何間^マニカハ老ハ来ヌラン
ト恠^{マレ}紅^イ玉^ヒノ膚消^ヘテ今日ヲ限^ルノ命共カナト思召^レ坐^{ソ、ロニ}

思沈マセ給^ヒ臯御心ノ遺^ル方ナサニ年来御祈^リ師トテ
御誦^シ(説^ク)経御撫^ナ物ナト奉^セ給^ヒ臯北野ノ社僧ノ坊ニ御坐
シテ一七日參籠^シ之御志有由^ヲ被^レ仰^ケレハ彼様ノ【2オ】
時節ハ武家ノ聞^ヘモ非^ズ(不^レ)無^キ憚^{ハ、カリ}ケレ共日来ノ御恩^モ重^モ

カリケレハ無^キ情ハ如何ニト思^テ頓^テ拜^セ殿ノ傍^ニ纒^{ナル}一^間
ヲシツラヒ只世(尋^ム)常ノ青女房ナトノ參籠シタル躰ニテ
ソ奉^レ置^臯古ナラハ金(錦^キ)帳^ニ粧^ヲヨコメ紗窓ニ艶^{エン}(左^ニ註^シ)ミヤヒヤ
カ)ヲトチテ

左右ノ侍^ヨ兒^ト其^ノ数^ヲ不^レ知^当ヨカ、ヤカシテ賞^イ(左^ニ註^シ)モチナシ)冊^{カシツキ}
可^レニ奉^ル何^シ

カ易^リ終^テタル御忍^ノ物籠^{ナレ}ハ都近キ渡^{ナレ}共^ノ言^間
通^人モナシ只一夜松ノ嵐ニ御夢ヲサマサレ主^ヲ忘^レメ又梅^カ
香^ニ昔^ノ春^ヲ思^シ出^スニモ昌泰ノ年ノ末ニ現^レ人^神

成^給給^シ心^尽ノ御旅^宿迄^モ今^ハ君ノ御思^ニナスラ^ヘ亦御【2ウ】
身ノ歎^ニ思^召知^レタル哀^ノ色ノ数々ニ御念誦^ヲ且^ク被^レ止^メテ

御泪ノ中ニ一首ノ哥ヲ思ヒ連テ給イ臯ル

忘スハ神モ哀ト思ヒシレ心尽シノイニシヘノ旅

トアソハシテ且御真寝有リ臯其夜ノ御夢ニ衣冠正シ

クシタル老翁ノ年八十有余ナルカ左ノ手ニ梅ノ枝ヲ捧ケ右ノ手ニ

鳩ノ杖ヲ取りテ取苦氣ナル躰ニテ御局ノ臥シ給ヘル枕辺

立給ヘリ御夢心地ニ恠ク思食テ篠ノ小竹ノ一節モ問ヘキ

人ノ有ヘシ共覺ヌ都ノ外ノ蓬生ニ恠ヤ誰人ノ道踏迷イ臯

徘徊ソヤト御尋有ケレハ此老翁世ニ哀氣ナル気色ニ【3オ】

テ言出タル言葉モナシ良久ケ在リテ立歸リ臯力持タ

ル梅ノ一枝ヲ御前ニ差置タリ御局是ヲ御覽スルニ一

首ノ哥ヲ短冊ニ書テソ付タリ臯

廻來テ終ニスムヘキ月影ノシハシ曇ヲ何歎ラン

ト御夢覺テ此哥ノ心ヲ御案有ルニ君終ニ還幸成

テ雲ノ上ニ令住可給ヲ御可レ有ト憑敷ノ思召レ臯

彼ノ聖廟ト申ハ大慈大悲ノ本地天満天神之垂迹

ニテ御座ハ一度歩ヲ運人モ忽ニ二世ノ悉地ヲ成就シ

纔御名ヲ唱ル輩モ万事ノ所願満足ス況ヤ千行万行【3ウ】

之紅涙ヲシタテ、七日六夜ノ丹誠ヲ致セ給シカハ懇精暗

通シテ感応忽告有リ世已ニ澆季ニ及ト云、共信心有

レ誠則ハ靈鑑亦新也臯ト感歎(嘆)涙ニ余レリ

楠出ニ張天王寺ニ事

元弘二年三月五日左近將監時益越後守仲時兩

六波羅ニ成リテ関東ヨリ上洛セラル此三四年ハ常葉ノ駿

河守範貞兩六波羅ノ成敗ヲ司テ有シカ堅ク辞シ(申ケルニ依也爰楠兵

衛尉正成去年赤坂城ニ)自害シテ死タル真似ヲシテ落タリシヲ誠ソト

得意テ武家

ヨリ其跡ヲ湯浅ノ孫六入道定仏(在サタナリ)ヲ地頭ニ居テ置レタリ【4

オ】

ケレハ今ハ河内国ニヨイテハ異ナル非ト被レ思臯処ニ

同四月三日正成五百余騎ヲ卒シテ俄ニ湯浅ノ城ヘ押

寄テ息ヲモ統セス攻戰此城ニ兵根ノ用意乏シカリ

ケレハ定仏ワカ紀伊国ノ所領安瀬河ノ庄ヨリ人夫五百

人ニ兵糧ヲ持セテ夜中ニ城ヘ入ントス楠是ヲ風ニ聞テ兵

ヲ道ノ切所ヘ差シ遣シ悉ク是ヲ奪イ取テ臯サテ其俵ニ

物具ヲ入テ馬ニ負セ兵ヲ二三百人兵士ノ如クニ出立テ

セテ城ヘ入ントスル時楠力勢共是ヲ追散ラントスル真似

ヲシテ追ツ返ツ同作士戰ヲソ為タリ臯定仏見レ之兵【4ウ】

糧入ル兵士共ソト得意テ城ヨリ打テ出坐成敵共ヲ皆

城中ヘソ引入臯楠力兵共思様ニ城中ヘ入終ッテ俵ノ中

ヨリ物具取出シヒシト固テ鬨声ヲソ上タリ臯湯浅

ハ前後ノ敵ニ被レ付テ少モ鬨ヘキ様モ無リケレハ力無頸ヲ

述テ降人ニソ成ニ臯正成頓テ其勢ヲ合テ七百余騎

弥勢付テ和泉河内ノ兩國ヲ催ス不靡ト云者ナシ

日ヲ逐テ大勢ニ成ケレハ同十七日先住吉天王寺渡辺

ヘ打テ出渡辺ノ橋ヨリ南ニ陣ヲ執リ六波羅ノ寄手ヲ

今哉々々ト待懸タリ依レ之和泉河内ノ早馬頻浪ヲ【5オ】

打テ楠已ニ京都ヘ責上ル由ヲ告申ケレハ京中ノ騷動

斜ナラス武士東西ニ馳散テ貴賤上下周章騒ケタ

極リナシ此ケレハ六波羅ニハ畿内近国ノ勢雲霞之

如ク馳集テ楠今ヤ寄ト待レケレ共敢テ寄臯モ無リ臯

去テハ聞ニハ似ス楠小勢ニテソ有ルラン此方ヨリ推寄打散

トテ隅田高橋ヲ六波羅ノ軍奉行トシテ四十八ヶ所ノ

簞屋并ニ在京人畿内五ヶ国ノ勢ヲ天王寺、差向

ラル其勢都合七千余騎同廿日ニ京都ヲ立テ尼崎

神崎柱本ノ辺ニ陣ヲ取所々ニ遠籌ヲ焼テ其夜【5ウ】
 ヲソシト待明ス楠聞レ之ニ千余騎ヲ三手ニ分テ宗徒ノ
 勢ヲ八住吉ト天王寺トニ隠シテ纒ニ三百余騎ヲ渡辺ノ
 橋爪ニ扣サセ大篝二三ヶ所ニ焼セテ相向ヘリ是ハ態ト敵
 ニ橋ヲ越サセテ水沢ニ追ハメ雌雄ヲ一時ニ決センカ為也其程
 ニ明レハ四月廿一日六波羅勢七千余騎所々ノ陣ヲ一所
 ニ合テ渡辺ノ橋ノ爪迄打苜爰ニテ河向ニ扣タル敵ノ
 勢ヲ見巨ハ纒ニ三百騎ニハ不レ過ト覺テ疲馬ニ繩
 手綱懸タル武者共也隅田高橋見レ之去レハ社和泉
 河内ノ勢ノ分際サコソ有ラメト思ツルニ合テ墓々【6オ】
 敷敵ハ一人モ無リケリ奴原一々ニ召捕テ六条河
 原ニ切懸ンスル物ヲト云俛ニ二騎打入テ橋ヨリ下ヲ
 打渡ス七千余騎ノ兵共見レ之我先ニト馬ヲ進テ或
 橋ノ上ヲ歩セ或河ノ瀬ヲ渡テ向岸ニ懸上楠勢見
 レ之速矢少々射捨テ、一鬪モ鬪ス天王寺ノ方ヘ引退
 ク六波羅勢勝ニ乗テ人馬ノ息ヲモ続セス天王
 寺ノ在家ノ端迄揉々、テソ進タリ梟楠ハ思程敵
 ノ人馬ヲ疲カシテ二千余騎ヲ三手ニ分テ一手ハ天王寺
 ノ東ノ端ヨリ敵ヲ弓手ニ請テ懸出ル一手ハ西門ノ石ノ【6ウ】
 鳥居ヨリ懸出テ魚鱗懸ニ破テ入一手ハ住吉ノ松ノ陰
 ヲリ蒐出テ靄翼立ニ開合ス六波羅勢見レ之合レハ対
 揚スヘキ迄モナク大勢也ケレ共陣ノ張様混ニシテ却テ小勢
 ニ被レ困マヌヘウソ見ヘタリ梟隅田高橋見レ之敵ハ後ニ大
 勢ヲ隠シテ付、梟ソ此辺ハ馬ノ足立悪、シテ叶マシ少広
 場ハ敵ヲ卒、出シ勢ノ分際ヲ見刷、テ蒐合々々々勝負
 ヲ決セヨト下知ケレハ七千余騎ノ兵共敵ニ後ヲ切レヌ先
 ニト渡辺ノ橋ヲサシテ引退ク楠勢是ニ利ヲ得テ三方ヨ

リ勝鬪ヲ作りテ追懸ル渡辺ノ橋近ク成ケレハ隅田高橋【7オ】
 馬ヲ引返テ敵ハ其迄ノ大勢ニテハ無リ梟ソ爰ニテ不
 返サ大河後ニ有テ悪カルヘシ返セヤ者共トテ馬ノ足ヲ立直シ々々
 下知シケレ共大勢ノ挽立タル癖ナレハ一返モ不レ返只我先ニ
 橋ヲ渡シト危ヲモ不云馳重ナリ梟間人馬共ニ橋ノ上ヨ
 リ閑落サレテ水ニオホル、者不レ知其數ニ或ハ淵瀬モ不レ知
 河ヲ渡リ懸テ流テ死ル者有或ハ高キ岸ヨリ馬ヲ馳倒ラシ
 シテ其任ニ死ヲ致モ有只馬ヲハナレ物具ヲ捨テモ遁延ントスル
 者ハ有レ共敵ニ返合テ一太刀モ打違ントスル者ハ一人モナシ
 去ハ七千余騎ノ兵共残少討成レテ匍々京ヘ逃ケ上其【7ウ】
 翌日何成者カ為タリケン六条河原ニ高札ヲ立テ一首
 ノ哥ヲソ書タリ梟

渡辺之水何計リ早梟レハ高橋落テ隅田流ル覽
 ト京童ノ癖ナレハ此落書ヲ或ハ哥ニ作りテ謳或語リ
 伝テ呀、梟間隅田高橋無ニ面目、更ニ思テ且ハ出仕
 ヲ留テ空病シテコソ居タリケレ兩六波羅此更ヲ聞テ
 不レ安更ニ被思ケレハ其比京中無勢成トテ閑東ヨ
 リ被レ上セタリ梟宇都宮ノ治部大輔ヲ呼ヒ寄テ宣、梟ハ
 合戦ノ習時ノ運ニヨリテ雌雄ヲ易ル更千(上)古ヨリ是無ニ【8オ】
 非ス雖トモ、然ト今度寄ノ負ハ偏ニ大将ノ謀トノ拙ニヨリ亦
 士卒ノ臆病成力故也天下ノ嘲哂口ヲ塞クニ処無ナシ
 就レ中仲時罷上シ後重テ御上洛候シ更ハ凶徒若シ蜂
 起セハ御向有静謐セラレ候ヘトノ為也キ今ノ如キハ敗
 軍ノ兵ヲ駈集テ幾度向ケテ候共墓々敷合戦シツ
 共覺ヘ候ハス且ハ天下ノ一大事此時ニ候哀御向有テ御
 対治候ヘカシト宣ヒケレハ宇都宮畏テ申梟ハ大軍已ニ
 ニ利ヲ失イ候テ後小勢ヲ以罷向ン更ハ如何ト存候ヘトモ閑

東ヲ罷立シ始ヨリ此様ノ御大吏ニ臨テ命ヲ輕クセン也【8ウ】
 ヲ存候キ今ノ時分必シモ戦ノ勝負ヲ見ル所ニテ候ハ子ハ一人
 ニテ候共先罷向テ合戦難儀ニ候ハ、重而御勢ヲコソ
 申候ハメト誠ニ思切タル躰ニ見エテ暇申テソ帰臯宇
 都宮一人武命ヲ含テ向フ軍也命ヲ可レ惜ムニ非ケル態ト宿
 所ハモ不レ帰六波羅ヨリ直ニ六月十九日天王寺ヘトソ下リ
 臯東寺ノ辺迄ハ主從纔ニ十四五騎カ程ト見シカ洛中
 ニ所ノ有手ノ者共聞レ伝ヘテ此彼ヨリ馳加リ臯程ニ四塚作リ
 道ノ辺ニテハ其勢五百余騎ニ成ニ臯路次ニ行合
 者ヲハ何成ル權門勢家共不レ云乘リ馬ヲ奪イ取り人夫ニ【9オ】
 駢立テ通り臯間行旅ノ往返道ヲヨケ閫（在注ヲカ）里ノ民屋
 戸ヲ閉タリ其夜ハ柱本ニ陣ヲ取テ明ヲ待ツ其志何生
 テ婦ラント思フ者ハ無リケリ爰ニ河内国ノ住人和田ノ孫三郎
 某此由ヲ聞テ楠カ前ニ來テ申臯ハ先日ノ合戦ニ負
 腹ヲ立テ六波羅ヨリ宇都宮ヲ向ケ候ナル今夜已ニ柱本ニ付
 テ候ナル其勢僅ニ六七百ニハ不レ過ト見テ候也先隅田高
 橋七千余騎ニテ向テ候ヲタニ我等纔ノ小勢ニテ追
 散シテ候ソカシ而モ今寄ハ勝ニ乘テ大勢也敵ハ機ヲ失
 テ小勢也宇都宮縦猛ク勇リト云共何程ノ力候【9ウ】
 可キ今夜逆寄ニ推シ寄テ打散テ捨ハヤト申ケレハ楠且ト
 思案シテ申臯ハ合戦ノ勝負必シモ大勢ニヨラス只士卒
 ノ心ヲ一ニスルト不レ為トニ依レリ去ハ大敵ヲ見ハ欺キ小敵ヲ
 見ハ恐ヨト申ハ爰也先思テ見ルニ先度ノ合戦ニ大勢
 打負テ引退ク処ヘ宇都宮一人小勢ニテ相向フ志一人モ
 生テ帰ントハ余モ思候ハシ就レ中其機分ヲ計ルニ宇都
 宮ハ是閑東一ノ弓矢執也紀清兩党ノ兵元來戰
 場ニ臨テ命ヲ思叟塵芥ヨリモ尚輕シ其勢七百余

騎志ヲ一ニシテ鬪ヲ決セハ当手ノ兵縦退ク志ナク共大半必ス【10オ】
 討ルヘシ天下ノ吏全ク此一戦ニ不レ可レ依未レ還ノ合戦ニ多
 カラヌ寄勢ヲ初度ノ戦ニ被レ討ナハ後日ニ誰カ力ヲ合シ
 良將ハ不レ鬪シテ勝ト申爰候ヘハ正成明日ハ態ト此陣ヲ
 颯ト引退キ敵ニ一面目有様ニ思ハセテ四五日ヲ経テ後
 方々ノ峯ニ遠籠ヲ燒モテ一ムシ蒸程ナラハ坂東武者習
 程無ク機疲レテ長居シテハ中々々悪カリナン一面目有時誘
 ヤ引返ント云ヌ者不可有去ハ懸ルモ挽クモ節ニヨルトハ彼様
 之時ヲ申候也夜已ニ曉天ニ及ヘリ敵定テ今ハ近キヌラン
 誘給ヘト云テ楠天王寺ヲ立ケルハ和田モ湯浅モ諸共【10ウ】
 打烈テコソ引退ニケレ去程ニ夜明レハ宇都宮七百余
 騎ノ勢ニテ天王寺ヘ推寄古宇津ノ在家ニ火ヲ懸テ
 鬨声ヲ上タレ共敵ナケレハ出合ス付ソスラン露ニ懸テ
 敵ニ中ヲ破レ後ヲ縮ラルナト下知シテ紀清ノ兩党馬足ヲ
 ソロヘテ天王寺ノ東西ノ口ヨリ懸入テ二三ケ度迄東西
 南北ヘ懸廻々々見ケレ共兼テ引タル敵ナレハ一人モ残留ラ
 ス宇都宮鬪サル先ニ一勝シタル心地シテ本堂ノ前ニテ馬ヨ
 リ下上宮太子ヲ伏シ拜ミテ是武力ノ致ス所ニ非ス只神明
 仏陀ノ擁護ニカ、レリト誠ニ信心ヲ起シ歡喜ノ思ヲナセリ【11オ】
 頓テ六波羅ハ早馬ヲ立テ天王寺ノ御敵ヲハ即時ニ追落
 テ候也ト申タリケレハ兩六波羅ヲ始トシテ御内外様ノ諸
 軍勢ニ到迄宇都宮カ今度ノ振廻抜群也ト誉メ人
 社無リ臯宇都宮天王寺ノ敵ヲハ輒ク追落タル心地シテ
 一面目ハ有躰ナレ共頓テ敵陣ヘ責入シヌモ無勢ナレハ
 不レ叶誠戰一度モ不レ為シテ引返シヌモ遺ナレハ進退
 谷マツテ居タル処ニ四五日ヲ経テ後和田楠和泉河内ノ野
 伏共ヲ駢リ集メ可然兵ヲ二三百騎ヲ差副テ天王寺ノ

渡ニ遠籌ヲソ令レ燒臬深ケ行クマ、ニ是ヲ見ケレハ秋篠【11ウ】

ヤ外山ノ里生駒崗ニ見ユル火ハ晴タル夜ノ曉ノ星ノ河漢

ニ烈ルヨリモ数繁シ藻塩草敷津ノ浦難波里ニ燒ケ篝ハ
漁舟ニトモス求食火ノ波ヲ燒カト恠シマル捻テ大和河内
在リト有ル所々ノ山々浦々ニ篝ヲ燒ヌ所ハ無リ臬其勢

何百万騎カ有ント推量レテ魏シ如此スル叟兩三度
ニ及テ次第相近ハ弥ヨ東西南北四維八方ニ充滿シテ暗夜ニ
昼ヲ易タリ宇都宮見レ之敵寄セラハ一戰シテ雌雄ヲ一時

ニ決ント志テ馬ノ鞍ヲモ休ス鎧ノ上帶ヲモ解テ待懸タリ
臬力戰ハ無テ敵ノ取り廻ヌ成ル篝火ニ勇氣疲カレ武力タユミテ【12オ】

哀引返ハヤト思フ心ソ付ニ臬此処ニ紀清兩党輩
モ我等纔ノ小勢ニテ此大敵ニアタラン叟ハ始終如何ト覺

テ候先日当所ノ敵ヲ叟故ナク追落シテ候ツルヲ一面
目ニテ今ハ只御上洛候ヘシト申ケレハ諸人皆此儀ニ同シテ

七月廿七日ノ夜半ニ宇都宮大王寺ヲ引テ上洛スレハ
翌日ノ早旦ニ楠頓テ入リ替ル誠ニ宇都宮ト楠ト相闘

テ勝負ヲ決ントナラハ兩虎ニ龍ノ闘トナリテ何モ死ヲ
共ニスヘシ去レハ互ニ是ヲ恐レ臬ニヤ一度ハ楠挽テ謀コトヲ千

里ノ外ニ廻シ一度ハ宇都宮退テ名ヲ一戰ノ後ニホト【12ウ】
コスは皆智深く慮遠シテ良將タリシ故也去程ニ正成

二度天王寺ハ打テ出威猛ヲ逞 スト云共民屋ニ煩ヲモ
成ス士卒尚礼ヲ厚シ臬間近国ハ申不レ及遐壤(左注トヲシツチクレ)遠

境ノ人迄モ聞伝テ馳加臬程ニ其勢漸ク強大ニシテ今ハ
京都ヨリ左右ナク討手ヲ下ル、叟難レ叶トソ見ル臬

楠望ニ見未來記ヲ叟
同八月三日正成住吉ニ參詣シテ神馬ヲ三疋奉ル亦
翌日天王寺ニ參詣シテ白鞍置タル馬一疋ニ白絲白綾威ノ鎧一

領副テ牽曳進ス是ハ大般若転読ノ御布施也啓白叟【13オ】

終ケレハ宿老ノ寺僧卷数ヲ捧テ来レリ楠即対面シテ申

臬ハ正成不肖ノ身トシテ此一大叟ヲ思立候叟涯分
ヲ不レ計ニ似タリト云共勅命ノ不レ輕叟ヲ存ニ依更ニ身
命ノ危キ事ヲ忘タリ而ニ兩度ノ軍聊勝ニ乘テ諸國ノ兵

不レ招ケニ加ハワレリ是天地時ヲアタハ仏神眸ヲ廻サル、カト覺
テ候誠哉覽伝ハ承候ヘハ上宮太子ノ当初百王治天

ノ安危ヲカンカヘテ日本一州ノ未來ヲ書置セ給テ候
成ノ拜見若不レ可レ苦ニテ候ハ、今ノ時ニ相イ当テ候ハンスル卷計リ
ヲ一見仕候ハヤト申ケレハ宿老ノ寺僧上宮太子守屋【13ウ】

ノ逆臣ヲホロボサレテ始テ此寺ニ仏法ヲ弘ラレ候シ後神代
ヨリ始テ持統天王ノ御宇ニ到迄ヲ記シ留ラレタル書三

十卷ヲハ前代ノ旧事本記トテト部宿祿是ヲ相伝シテ
有職ノ家ヲ立テ候此ノ外ニ亦一卷ノ秘書ヲ被レ留テ候

是ソ持統天皇ヨリ以來累代ノ王業天下ノ治乱ヲ
被レ記タル物ニテ候是ヲハ容易ニ人ノ披覽スル物ニテハ候

ハ子共今別儀ヲ以潜ニ見參ニ入候ヘシトテ即秘符ノ銀
鑰ヲ開テ金軸ノ書一卷ヲ執出セリ正成悦テ是ヲ開ニ
不思議ノ記録一段在リ【14オ】

当三人王九十六(五)代ニ天下ニ乱テ而主不レ安此ノ時ニ
東魚來テ而吞ニ四海ノ日没コト西天(海)ニ三百七十余ケ

日西鳥來テ而喰ニ東魚ヲ其ノ后海内歸トイハスニ
年如ニ彌猴(左注コケザル)ノ者掠ルコト天下ヲ三十余年大凶歸ニ
一元ニ

ト云々正成能々思安シテ此記文ヲ勤ヘ臬者凡先帝巳ニ
人王始テ九十六(五)代ニ当リ給ヘリ天下ニ一乱シテ主不レ安ト有ハ

是レ此時成ヘシ東魚來テ吞ニ四海トハ逆臣相模入道カ

一類可成ル西鳥来喰シ東魚ヲトハ何様関東ヲホロホス人
可レ有日没^{イタル}西天^ニ海^ニト云ルハ先帝隱岐国へ被遷サセ給事成【14ウ】

へシ三百七十余ケ日ト有ハ明年ノ春ノ比宮必ス隱岐国ヨリ
還幸成テ二度帝位^ニ合^レ即^レ可^レ給^レ可^レ成^レト文意

明^カ二勲^ヘテ天下ノ反覆不^レ遠^トト憑數ク思ケレハ金造リノ
太刀一振此ノ老僧ニアタエテ此ノ未来記ヲハ亦元ノ秘符

ニソ令^{サセ}レ納^メ梟^ノ後^ニ思^ハ合^ルニ正成力勲更ニ一モ不^レ違^ハ是
誠ニ大権ノ聖者ノ末代ヲカ、ミテ記置レタル叟ナレ共文

質^シ三統ノ礼交少モ不^レ違^ハ梟^ハ不^レ思^ハ儀ナリシ籤^セ〔^ニ從^ニフタノコト^ト〕文也
関東勢上洛事^ニ三ノ城手^ヲ配事

其比播磨国^ニ具平親王六代ノ苗裔[〔]從^ニ三位季房^{スエ}〕【15オ】
カ末孫^ニ赤松次郎入道円心ト云武士有元来其心

調如トシテ人ノ下風^ニ立^シ叟^ヲ不^レ思^ハシカハ此時絶タルヲ
継廢^レタルヲオコシテ名ヲ顯シ忠ヲ抽ハヤト思梟^ハ此^ニ二

三年大塔宮^ニ付纏^ヲ奉^リテ吉野^ト津川^トノ艱難ヲ經
梟円心^ノ子息帥律師則祐令旨ヲ捧テ来レリ披^テ見^ル

レ^ニ二不^レ日^ニ揚^テ義兵^ヲ卒^ニ軍勢^ヲ可^レ令^ニ誅^ニ罰^ニ朝敵^ヲ於^テ有^ルニ
其功^者恩賞宜^レ依^レ請^ト被^レ書^テ委細ノ御叟書^ニ

十七ヶ条ノ恩裁^ヲ被^レ副^{タリ}条々何モ家ノ面目世
ノ所望可^レ成^ル事成^レハ円心不^レ斜^ニ悦^テ先^ニ当^ニ国^ノ佐用^ノ【15ウ】

庄^ヲ苦^ケ繩^山ニ城ヲ構^テ与^力ノ輩ヲ相招^ク其ノ威漸^ニ近^ク
国^ニ二振^ケレハ不^レ征^セ〔^ニ注^ヒキイル^ル〕二国中ノ兵^ヲ相集^テ無^レ程^ニ千余騎^ニ成

二梟頓^テ枕^カ坂山ノ里^ニ一ヶ所^ニ関^ヲ居^テ山陽山陰ノ兩
道ヲ差塞^ク是ヨリ西国ノ道^止テ国々ノ武士上洛スル

叟^ヲ不^レ得^テ去^ル程^ニ幾内西国ノ凶徒日ヲ追^テ蜂起セシム
ル由自^ニ六波羅^ノ頼波^ニ早馬ヲ打^セテ関東へ注進セラレケ

ル間去ハ討手ヲ差遣^セヨトテ相州一族ノ外東八ヶ国

ノ中^ニ可^レ然^ル大名共ヲ相催^シテ被^レ上^セ先^ニ一族ノ大名二ハ阿
曾ノ彈正少弼名越^ナ遠江入道大仏ノ前陸奥守伊具^グ【16オ】

左近大夫將監大仏武藏ノ左近將監陸奥右馬助此外
外様大名二ハ千葉ノ大介小山ノ判官宇都宮ノ三河ノ權守

武田ノ伊豆ノ三郎小笠原ノ彦五郎土岐ノ伯耆入道熏^ニ〔^ニ蘆^ノ〕
名判官三浦ノ若狭ノ五郎判官千田^ノ〔^ニ鎮田^ノ〕ノ太郎城ノ大宰小

式入道佐々木ノ隱岐前司同備中守結城七郎左衛
門長沼^ノ〔^ニ駿河權守小田ノ陸奥^ノ〕守長崎ノ四郎左衛門

尉同九郎左衛門尉洪谷ノ遠江ノ權守同越ノ三河入道
長沼弥六左衛門工藤ノ次郎左衛門狩野七郎左衛門

尉伊東ノ常陸前司同大和入道安藤々内左衛門尉【16ウ】
宇佐美ノ撰津前司二階堂出羽入道同下野ノ判官

同常陸介安保左衛門尉入道南部ノ次郎山城四郎左
衛門尉此等ヲ始トシテ都合百三十人其勢卅万七千五

百余騎九月廿日鎌倉ヲ立テ十月八日前陣已^ニ京
都^ニ着^ハ後陣ハ未足柄箱根ニ支^{タリ}不^レ是^ニ河野九

郎左衛門尉四国ノ勢ヲ打烈テ大船三百余艘ニテ尼崎
ヨリ上テ下京^ニ着^ク厚東入道大内介安芸熊谷長

門周防ノ勢ヲ卒シテ二百余騎兵庫ヨリ上テ西京^ニ
付甲斐信濃ノ源氏七千余騎中山道ヲ經テ東山ニ付^ク江馬越^ノ【17オ】

前守淡河^ノ〔^ニ右^ノアワカワ^ノ〕ノ近江守北陸道ノ七ヶ国ノ勢ヲ卒シテ三万余
騎東坂本ヲ經テ上京ニ付^テ諸国七道ノ軍勢共

我モ々々ト馳^{上リ}梟間京白川ノ大家小家所^レ殘^{ナク}居
余テ宇治醍醐小栗柄嶮峨仁和寺西山北山賀茂

北野彼^ノ堂[〔]此^ノ〕河崎清水六角堂ノ搦門ノ下鐘樓ノ中マ
テモ軍勢ノ宿ヌ所ハ無^リ梟日本小国成ト云共是程

二人ノ多^リ梟叟ヨト始^テ驚^ク計也依^レ之元弘三年間

二月三日諸国七道ノ軍勢八十萬騎ヲ三手ニ分テ吉野赤坂金剛山ノ城ヘソ被レ向臯吉野ヘハ二階堂出羽入道【17ウ】

ヲ大将トシテ態ト他勢ヲ交ス二萬三千余騎ニテ上道下道中道ヨリ三手ニ成テ相向フ赤坂ヘハ阿曾ノ陣

正少弼ヲ大将トシテ其勢八万余騎先天王寺住吉ノ陣ヲ取金剛山ヘハ陸奥右馬助大将トシテ二十萬騎奈良

路ヨリ向フ中ニモ長崎ノ悪四郎左衛門尉別而侍大将ヲ承テ追手ヘ向臯力態ト己カ勢ノ程ヲ人ニ令シ知トヤ思ケ

ン一日引下テソ向臯先旗差ノ次ニ大退敷馬ニ厚給カケテ一様ノ鎧着タル兵八百余騎二町計先立テ令レ打

タリ我身ハ其次ニ纏纏（在キクトチ）ノ鎧直垂ニ精好ノ大口ヲハラセ

紅【18オ】襟濃ノ鎧ニ白星ノ五枚背ノ八龍ヲ打テ付タルヲ猪頸ニ

着ナシ銀ノ磨付ノ髓当ニ金造ノ太刀ニ二振帶テ一ノ戸黒トテ五尺三寸有リ臯坂東一ノ名馬ニ金具ニ捨テ船

ヲ摺タル鞍ヲ置款冬ノ色ノ厚総懸テ三十六刺タル銀箆ノ大中黒ノ矢ニ本滋藤ノ弓ノ真中拳ニキツテ小路ヲセハ

シト令レ歩タリ片小手ニ髓當シテ諸具足付タル中間五百人ニ行ニ小路ヲ令レ歩テ馬ノ前後左右ニ相

隨其次ニ四五町引下テ思々ニ甲タル兵十万余騎背ノ星ヲ輝カシテ鎧ノ袖ヲ重テ沓ノ子ヲ打タルカ如ク道四五【18ウ】

里カ程ヲ支テ閑ニ是ヲ令レ打臯其威馱然トシテ天地モシノキ山川モ動ク計也此外外様ノ大名ハ二千余騎引

別々々夜昼十三日迄引切スソ向臯吾朝ノ申ニ不及唐土天竺大元南蛮ニモ未是程ノ大軍ヲ動ス夏ハ難有トソ見タリ臯

赤坂城合戦事 人見本間拔懸事

其（去）ル程ニ赤坂城ヘ向ラレ臯大将阿曾ノ彈正少弼ハ後陣

ノ勢ヲ待調ソロン為二天王寺二兩日逗留有テ二月三日午刻ニ矢合セ可有拔懸ノ輩ニヲイテハ罪科タルヘキ由ソソ【19オ】

被レ触臯爰ニ武藏国ノ住人二人見ノ四郎入道恩阿弥ト云者有臯カ本間ノ九郎ニ向テ語り臯ハ奇ノ軍勢雲霞

ノ如成レ敵城ヲ責落ン夏ハ疑ナシ但夏ノ様ヲ案スルニ関東天下ノ權ヲ取テ已ニ七代ニ余レリ盈ヲカク理所レ通ナ

シ其上臣トシテ君ヲ流奉リタル積惡豈果テ其身ヲ亡サランヤ恩阿不肖ノ身也ト云共今武恩ヲ蒙リテ齡已ニ二十七

十三ニ成ヌ今ヨリ後指タル思出モナキ身ノ坐ニ長生シテ武運ノ傾ヲ見シモ老後ノ恨臨終ノ障共成ヌヘケレハ明

日ノ合戦ノ先ヲカケ一番ニ打死シテ其名ヲ末代ニ殘ント【19ウ】

存也ト語ケレハ本間九郎心中ハ実ト思ナカラ今度ノ合戦ニハ誰ト云共先ヲハ被レ懸間敷物ヲト思ケレハ枝葉

ノ夏ヲモ宜フ者哉是程ノ打籠ノ軍ニ坐ナル先懸シテ討死シタリトテモ高名共被レ云マシ只某ハ人次ニ振廻ント存ル也

ト申ケレハ恩阿世ニモ無興氣ニテ本堂ノ方ヘ行臯本間恠ヲ思テ人ヲ付テ見ケレハ矢立ヲ取出シ石ノ鳥居ニ何夏

トハ不レ知一筆書付テ己カ宿ヘソ歸臯本間去レハ社此者ニ一定明日ノ先懸セラレヌト心許モ無ケレハ未宵ヨリ打出

テ唯一騎忍ニ東条ヲ指テソ向臯カ石川河原ニテ夜ヲ【20オ】明シ朝霞ノ晴間ヨリ南ノ方ヲ見遣ケレハ紺唐綾ニ

白母衣掛テ鹿毛成馬ニ乗タル武者唯一騎赤坂ヘ向テソ令レ歩臯何者哉ラント馬ヲ打寄テ是ヲ見人見ノ

四郎入道恩阿也臯人見本間ヲ見テ夜部宣シ夏ヲ誠トハシ思タラハ孫ホトノ人ニ出拔レテマシト云テカラノト打笑テ頻ニ馬ヲハヤメテ臯本間跡ニ追付テ今ハ互ニ諍イ申

不^レ及一所二戸^{カハ}ヲサラシテ冥途迄モ同道申スルソト云イケレハ
人見申ニヤ及ト返^レ更シテ跡ニ成先ニ成物語シテ打^カ鼻カ赤
坂城近ク成ケレハ二人者共馬ノ鼻ヲナラヘテ懸アケ城ノ【20ウ】
堀際迄打寄テ鎧踏^フバリ弓杖^{コウジ}ツキテ大音声ヲ揚^テ
称^{ナリ}鼻ハ武蔵国ノ住人人見四郎入道恩阿積年七十
三相模国住人本間九郎資忠生年卅七鎌倉ヲ出^シ始
ヨリ軍ノ先陣ヲカケテ戰場ニ戸ヲ埋マン更^レ存シテ罷向候
也我ト思ハン人出合テ手並ノ程ヲ御覽セヨト声々ニ喚
テ城ヲニランテ扣タリ城中ノ者共見^レ之是ソトヨ坂東武
者ノ風情ハ是只熊谷平山カ一ノ谷ノ先懸ヲ聞伝テ羨^{ウラヤヤシ}
クト思ヘル者共也跡ヲ見ニ烈武者モナシ亦其^レ迄ノ大名ト
モ見^ス溢者^ニノ不敵武者ニ跳^ツ合テ命失テ何^カ為^カ只置^テ【21オ】
更^レ様ヲ見ヨトテ東西鳴^{ナリ}ヲシツメテ返^モセス人見腹ヲ
タテ我等二人早旦ヨリ向テ称^{ナリ}共城中ヨリ矢ノ一ヲモ射
出ヌハ只臆タルカ敵ヲアナトルカイテ^レ其儀ナラハ手柄程
ヲ知セント云マ、ニ馬ヨリ飛テ下堀ノ上ニワタシタル細橋^シヲサラ^レト
走^リ渡^リ屏ノ脇ニ引^キ添テ木戸ヲ切テ落^シ鼻間城中是^ニ
サワキテ土小間^{サマ}矢倉ノ上ヨリ雨ノフル如ク射^ル矢ニ一人ノ者共
ノ鎧ニ糞毛ノ如ニ射立タリ本間モ人見モ元來討死セン
ト思立タル更^{ナレ}ハ何カハ一足モ退^ヒヘキ命ヲ限リニ鬪^テ二人
一所ニ討^レニケリ此迄^{コト}付^テ随^キテ飯后ノ十念^ノ勸^メツル聖本間カ【21ウ】
首ヲコウテ天王寺へ持^テ婦^リ本間^カ子息源内兵衛資貞
ニ始ヨリノ分野ヲソ語^リ鼻資貞父カ首ヲ一目見^テ一言ヲモ不
^レ出^只泪ニムセンテ居タリ鼻カ如何^カ思ケン鎧ヲ取テ投カケ馬ニ
鞍置セテ唯一人打^テ出^{ント}ス聖^カ佐^カ思^テ鎧ノ袖ヲ引留^テ是
ハ何^カ成^カ更^ニテ候ソ御親父モ此^レ合戦ニ先懸シテ只名ヲ天下
ノ人ニ知^{ント}思召^ス計成^ハ父子共ニコソ打^烈レテ向^セ可^レ給^共

命ヲハ相州ノ御為ニ捨^テ賞ヲハ子孫ノ栄花ニ残^{ント}被^レ思
鼻故ニコソ人ヨリ先ニ討死ヲ為^シ給^ヒツラメ然^ルヲ思^ル籠^ル所^モナ
ク亦敵ノ陣へ蒐^入テ父子共ニ討死シタマイナハ誰カ其跡^ト【22オ】
ヲトフラヒ誰カ恩賞ヲ蒙^ルヘキ子孫無窮ニサカウルヲ以
父祖ノ孝行ヲアラハス道トハ申也御悲歎^シ余^ニ無^ニ是非^一
死ヲアタヘント思召^ハ理^成共且^ク思^ト、マラセ給ヘト堅^ク制^シ
シケレハ資貞涙ヲ押^テ着タル鎧ヲソ脱置^キ鼻製^リ止
ニカ、ワリヌト嬉^ク思^テ本間カ頸ヲ小袖ニツ、ミ葬^レ礼^ノ為^ニ
ナル野辺ヘソ赴^キ鼻其間^ニ資貞今ハ制^シ止^ムヘキ人ナシト嬉
ク思^テ先上宮太子ノ御前^ニ参^リ今生ノ栄耀^キハ今日ヲ限^ノ
命ナレハ更^ニ所^レ祈^ニ非^ス只大悲ノ弘誓^誠有^ハ親ニテ候者
ノ討死仕ヌル戰場ノ同苔^ノ下ニ被^レ埋^テ九品安養ノ台^ニ【22ウ】
生ル身トナサセ給ヘト泣^キ祈^念ヲ凝^シテ夜ト共ニコソ立出ケ
ル石ノ鳥居ヲ見^レハ父ト共ニ討死シツル人見四郎入道カ
書付タル哥有^是ソ実^モ後^ノ世迄ノ物語ニモ留^ルヘキ
更^ヨト思^ケレハ右ノ小指ヲ食切^テ其血ニテ亦^一首^ヲ
書^ソヘ^テ赤坂城ヘソ向^鼻已^ニ城近^ク成ケレハ弓脇^ニ挟^ミ木
戸ヲ搗^テ城中ノ人ニ可^レ申^更候^トソ喚^キ鼻良暫^ク
有^テ兵一人櫓^ノ小間ヨリ顔^ヲ差^出シテ誰人ニテ御渡候ソ
ト問ケレハ是ハ今朝此ノ城ニ向^テ討死仕^テ候ツル本間ノ九郎
資忠カ嫡子^ニ源内兵衛資貞ト申者ニテ候也人ノ親ノ【23オ】
子ヲ思^憐誰^モ心^ノ暗^ニ迷^ラ習^ニテ候間共ニ討死センスル更^レ
ヲ悲^ミ我^ニ不^レ知^シテ唯一人討死仕^リ鼻ニテ候相^ト伴^者無^テ中
有^ノ途^ニ迷^ラン^モ其^サ社^ト想^像レ^候ヘハ同^ク討死仕^テ冥
途迄^モ父^ニ仕^マツル道ヲアツクシ候ハヤト存候^テ唯一騎
罷向^テ候城ノ大将ニ此様ヲ被^レ申候^テ木戸ヲ被^レ開候^ヘ
親ニテ候者ノ討死仕^ツラン所^ニ同^ク命ヲ留^テ其望^ヲ

達シ候ハント慇懃ニ更テ泣汲テソ立タリケル

一 関ヲ堅メテ居タル兵五十余人其志ノ剛ニシテ義ニ向フ

所ノ情敷哀レ成コトヲ感シテ忽ニ木戸ヲ開キ逆木除ケレハ【23ウ】

資貞城中へ蒐入テ五十六騎ノ敵ト火ノ散テ切合イ梟ルカツニ

ニ父方討シ其跡ニテ太刀ノ鋒ヲ口ニクハヘテ馬ヨリ逆ニ飛テヲ

手被貫レテコソ死ニケレ可惜ニ哉父ノ九郎ハ双ナキ弓馬ノ

達者ニテ国ノ為ニ要領（在任モチユル）タリ子ノ資貞ハ例ナキ忠孝ノ

勇士ニテ家ノ為ニ采名有リ人見ハ年老イ齡傾ヌレ共

義ヲシリ命ヲ見ル更時ト共ニ消息ヌス此三人同時ニ討死

シヌト聞ケレハ知モ不レ知モ推並テ歎ヌ者ハ無リケリ已ニ先懸ケ

ノ兵共拔ケタニ赤坂ノ城ヘ向テ討死スル由披露有ケレハ大

将即天王寺ヲ立テ被レ向梟力上宮太子ノ御前ニテ馬ヨリ【24オ】

下リ石ノ鳥居ヲ見給ニ左ノ柱ニ

花サカヌ老木ノ桜朽ヌ共其名ハ若ノ下ニ隠レシ

武藏国住人見ノ四郎入道恩阿老年七十三正慶

二年二月二日向ニ赤坂城ニ為ニ報シカ武恩ヲ討死シ畢

ト書タリ亦其右ノ柱ニ

待テシハシ子ヲ思暗ニ迷ラン六ノ衢ノ道シルベセン

相模国住人本間九郎資忠ノ嫡子源内兵衛資

貞生年十八歳正慶二年仲春二日父死骸為シテ

枕同戰場止レ命ヲ矣【24ウ】

ト書タリ梟父子ノ恩義君臣ノ忠貞此ニ首ノ哥ニ頌レ

テ骨ハ化シテ黄壤ニ堆ノ下ニ朽ヌレト名ハ止テ青雲九

天ノ上ニタカシ至今迄其ノ石碑ノ上ニ消ハ残レル三十一字ヲ見

人ノ感涙ヲ流ヌハ無ヘシ去程ニ阿曾ノ彈正少弼八万余騎ノ

勢ニテ赤坂城ヘ打寄城四方廿余町ヲ雲霞ノ如ニ執巻テ

先ツ義勢ノ関ヲ三声作ル其響山ヲ動シ地ヲ振ハシテ蒼海モ忽

裂ツヘシ此城三方ハ峯（岸）高シテ屏風ヲ立タルカ如シ南一

方計少平地ニ烈タル堀ヲ広サ深サ十四五丈ニ堀リ切テ岸ノ

額ニ屏ヲ更リ上ニ櫓ヲ挿並ヘタレハ何カ成大力早業成共【25オ】

輒ク責可レ近ク様ノ無リ梟レ其（共）ハ寄手大勢ナレハ思侮テ楯

ニハツレテ矢面ニ進ニ堀ノ中ヘ走リ下々切岸ヲ登ントシ梟処ヲ

城中ヨリ究竟ノ射手鏃ヲ調ヘテ思様ニ射梟間毎

日ニ手負死人ノ五六百人射出サレヌ日ハ無リ梟是ヲモ

痛ヌ悪手ヲ入替々々夜昼十三日カ間責タリケレ共城

ハ少トモ弱ラス弥氣ヲ吞テソ闘イ梟爰ニ播磨国ノ住人

二吉川八郎某ト云者大将ノ前ニ進出テ申梟ハ此

城ノ為ニ斃力責ニシ候ハ、幾年責候共落更候

ヘカラス楠此ノ兩三年和泉河内ヲ官領シテ若干ノ兵糧【25ウ】

ヲ取入テ候ナレハ兵糧左右ナクハ尽候マシ付之愚案ヲ廻シ

候ニ此城三方ハ谷深切テ地ニ烈ヌ一方ハ平地ニシテ而山遠シ

サレハ何ナル所ニ水可レ共有共覚候ハヌニ火矢ヲ以繁櫓ヲ射

候ヘハ水弾キニテ何度モ打消テ候近來ハ雨ノ降タル更

モ候ハヌニ是程水ノ卓散ニ候ハ何様南ノ山ノ奥ヨリ地ノ底

ニ樋ヲ伏テ城ヘ水ヲ懸タリト覚候哀人夫ヲ集テ山ノ

腰ヲ掘セテ御覽候ヘカシト申ケレハ大将実ニ此儀サモ

ト覚タリトテ頓テ人夫ヲ四五千集テ城ヘツ、キタル山ノ

尾ヲ一文字ニ堀切テ被レ見梟ニ案ノ如ク土底ニ二丈余ノ【26オ】

下ニ樋ヲ懸テ其渡ニ石ヲタ、ミ上ニ二枚瓦ヲ臥キ水ヲ十四町

カ外ヨリソ懸タリ梟此上水ヲ被レ止テヨリ後ハ城中ニ水乏ッ

シテ軍勢口中ノ渴ヲ忍ニ難シ四五日力程コソ草葉ニ置ケル

露ヲ掌メ夜氣ニウルホヘル土ヲ子フリテ雨ヲ待テ共雨不

降寄手是ニ利ヲ得テ間ナク火矢ヲ以矢倉ヲ射梟

間ニ追手ノ矢倉一念ナク焼落レヌ城中ノ兵水ヲノマ

デ十二日迄ニ成ケレハ今ハ勢力尽終テ防ヘキ方便モ無
リ梟間兎テモ死スル命ヲ誘ヤ未タ力ノ落終ヌ先ニ打出
テ敵ニ刺違テ思様ニ討死セントテ城ノ木戸ヲ開同時ニ打
出ントシ梟ヲ見テ城ノ本人平野ノ將監入道高橋ヨリ
走リ下リ袖ヲヒカヘテ申シ梟ハ且楚忽ノ更ナシ給ソ今是
程ニ力ツキ喉乾キテヨロメキ出タリトテモ思敵ニアフ更
難レ有名モナキ人ノ中間下部共ニ被虜 恥ヲサラサン更
モ心憂ルヘシ情 更ノ様ヲ案ルニ吉野金剛山ノ城未
相支テ不レ決西国ノ乱未不レ静今ノ降人ニ出タランスル者ヲハ
後ノ人々ニ見懲ニサセシトテ武家余モ切事非シト存也
兎モ叶ヌ我等ナレハ且事ヲ計降人ニ出テ武家若寡
ハ忠ヲ致シテ而モ咎ヲオキノヒ〔左補〕宮方亦強ハ馳帰テ運
ヲ開クヘシ死ル者ハ二度帰ラス天下ノ更未不レ知只命ヲ全
シテ時ヲ待ンニハ不レ如ト存ハ如何ト申梟ハ諸卒心ハ猛シト
云共道命ヤ惜シカリケン平野カ云儀ニ同シテ其日ノ討
死ヲハ止テケリ角テ翌日ノ戦半成取中ニ平野入道
高橋ニ上リテ大将ノ御方ヘ申入ヘキ子細候且合戦ヲ
留テ聞食レ候ヘト申ケレハ大将ヨリ渋谷ノ十郎ヲ以テ更ノ
子細ヲ尋ラル平野関口ニ出合テ申梟ハ楠和泉河内
西国ヲタイラケテ威猛ヲ振イ候シ取中一旦難ヲ遁ン
為ニ不レ意御敵ニ属シ候キ此子細京都ニ參テ申入【27ウ】

候ハント仕ル処大勢ヲ以推懸ラレ候間弓矢取身ノ習ニ
テ候ヘハ恐ナカラ一矢仕ニテ候其罪科ヲタニ御免可有ニ
テ候ハ、類ヲ延テ降人ニ參候ハンスルニテ候若不レ叶トノ御
誼ニテ候ハ、無レ力命ヲ際ニ合戦仕テ戸ヲ陣中ニ曝ヘキ
ニテ候此様ヲ兩大将ノ御方ヘ御披露候テ御左右ヲ承
ラントソ申梟渋谷立帰テ此由ヲ申ハ兩大将大ニ悦テ本

願安堵ノ御教書ヲナシ殊ニ功有者ニハ恩賞ヲ申沙
汰スヘキ由ヲ返答シテ合戦ヲ止メ梟城中ニ籠所ノ兵
二百八十二人明日死スル命ヲモ不レ思水ニ渴セル難レ堪サニ皆
降人ニ成テソ出タリ梟長崎ノ九郎左衛門尉是ヲ請取テ
先降人ノ法ニテ候ヘハトテ物具太刀刀ヲ奪イ執テ高手
小手ニイマシメ即六波羅ヘソ渡シケル降人ノ輩如此ナラント知
タラハ只討死ヲスヘカリ梟物ヲト後悔スレ共其ノ甲斐ナシ
日ヲ経テ京都ニ着ケレハ兩六波羅ニ禁置テ先合戦ノ更
始ナレハ軍神ニ祭リテ人ノ見懲ニサセヨトテ六条河原ニ出シ一人モ
不レ残首ヲ勿テ被レ懸梟是ヲ聞テコソ吉野金剛山ニ籠リ
梟敵共モ弥師子齒嚙ヲシテ降人ニ出ントスル者ハ無リケレ
太平記卷第六【28ウ】